

【2020年度 ESG ラージミーティング】 質疑応答概要

※ラージミーティングにおける主な質疑応答をご紹介します。

<日 時> 2020年12月9日(水) 13:00 ~ 14:30

<出席者> 明治ホールディングス(株)

・代表取締役社長 CEO 川村 和夫

・取締役専務執行役員CSO 古田 純

・執行役員 サステナビリティ推進部長 松岡 伸次

Q1: ESG 投資枠 300 億円に関して、利益への影響はどのように考えればよいでしょうか。

A1: 短期的には、設備投資に伴う減価償却費の増加により利益に対してマイナスの影響となりますが、必要な設備投資でもあり、早期の対応が中長期に見れば利益に寄与すると考えています。

また、この投資枠は従来の投資とは別に管理していきますので、各現場でコストアップ要因と捉えるようなネガティブな考え方を払拭できるのではと期待しています。これにより CO2 削減や水資源の適正利用の取り組みを加速させていきます。

Q2: チーフオフィサー制導入の目的と戦略会議での具体的な議論について教えてください。

A2: グループ経営を強化していくことを目的として、チーフオフィサー制度を導入しました。チーフオフィサーだけで構成されたグループ戦略会議を設置し、グループとしての成長戦略を作り上げるべく議論をしています。

戦略会議での議論としては、サステナビリティに関する内容が代表的です。各事業会社において、経営者自身がサステナビリティを経営にビルトインする意識を持つ必要があります。グループとして統一感のある取り組みにするためには、チーフオフィサー間で考えを統一していくことが重要になってきます。グループ一体となるようベクトルを合わせていきたいと考えています。

Q3: 炭素税におけるコストの増加は定量的にどの程度見込んでいますか。

A3: 現時点では具体的な数字を開示できませんが、乳原料については 2040 年、感染症については 2050 年を見据えて試算しており、百億円を超えると考えています。TCFDシナリオ分析では、2度シナリオで炭素税価格は1トンあたり 1.4~1.5 万円と想定しています。

Q4: 乳牛のメタンガスによる温室効果ガス排出について、どのように考えていますか。

A4: 世界の酪農産業が問題解決に向けて立ち上がりつつあるというのが現状ですが、国別に問題の深刻度が異なります。畜産に関わる温室効果ガス排出量は世界全体のうち 8%を占めると言われており、かなり大きな問題です。しかし、日本での畜産(生乳生産含む)に伴う温室効

果ガス排出量は日本全体の1%以下なので、日本だけでとらえると乳牛による温室効果ガス排出は深刻な問題とまでは言えません。

メタンガス排出量は乳牛の頭数によって変わるため、一頭あたりの生産乳量が上がれば、メタンガスの負荷は下がります。一頭あたりの生産乳量を上げていくことが解決策の一つではないかと考えています。また、メタンガスの排出が少ない乳牛の育種、飼料の改良等、様々な解決策を重ね合わせていけば、問題は解決に向かうと考えています。

日本政府はカーボンニュートラルの方針を打ち出しており、これから農業分野でも様々な施策が講じられていくと思います。私達乳業メーカーとしても酪農家の取り組みを後押ししていく考えです。

Q5: 指名委員会と報酬委員会の委員長は川村社長が就任していますが、その点についてどう考えていますか。

A5: 委員会での検討事項は合議によって決めています。社外取締役が3名、社内取締役が1名という構成となっており、イニシアチブを持っているのは社外取締役のメンバーとなります。私は委員長として、取りまとめ役、進行役といった事務局的な役割を担っています。

以上